

インドネシアのマハーバーラタ

前川 輝光

はじめに

フランスの東洋学者セデスの「レゼタ・アンドゥイゼ (Les Etats hindouises : インド化された諸国家)」という定式化が示すように、かつて東南アジア諸国はインド文明の強烈な影響下にあった。インドネシアもその例外ではなかった。ヒンドゥー教、仏教を中心とする宗教にとどまらず、法体系、地方統治の体系などにも濃厚なインド文明の影響が見られた¹⁾。ヒンドゥー教二大叙事詩『ラーマヤナ』『マハーバーラタ』もそうした文物と並び、インドネシアの地に伝えられ、独自の変容を伴いつつ、次第にそこに根付いていった。

本稿は、ヒンドゥー教二大叙事詩の中でも『マハーバーラタ』のインドネシアでの受容、変容について考察する。特に影絵芝居ワヤンにおけるマハーバーラタの世界に焦点を絞る。

主たる資料は、日本におけるワヤン研究・紹介の第一人者松本亮の一連の著作である。具体的には、発表順に『ジャワ影絵芝居考』(誠文図書、1975年)、『マハーバーラタの蔭に』(八幡山書房、1981年)、『ワヤン人形図鑑』(めこん、1982年)、『ラーマヤナの夕映え』(八幡山書房、1993年)、『ワヤン・ジャワ、語り集成(上下)』(八幡山書房、2009年)などである。

筆者のワヤンとの付き合いは98年5月半ばに始まる。『マハーバーラタ』を当面の研究テーマにしようと思ひ、文献を探していた時、『マハーバーラタの蔭に』の存在を知り、一読し、大いに刺激を受けたのであった。筆者の『マハーバーラタ』についての最初の本格的発言である『『マハーバーラタ』の人間群像』²⁾のもととなった亜細亜大学での公開講座(98年6月13日)

直前のことであった。同公開講座でもさっそく同書について簡単に触れている。筆者はこう発言していた。

この本は、私はつい最近読んだのだが、非常に面白かった。…一方では、インドの『マハーバーラタ』がインドネシア、特にジャワ島の文化に非常に細かな所まで忠実に継承されている³⁾。他方、思い切ってインドネシア的なのかジャワ島的な特徴が出て来てもいる。インドの本家の『マハーバーラタ』も…相当に強烈な話で、松本氏があるラジオ番組⁴⁾で言われた表現によれば「相当に厳しい話」。しかし、インドネシア的、ジャワ的な変容を経た『マハーバーラタ』もこれまたものすごい話である。ある面ではインドの『マハーバーラタ』よりも凄味があるのではないかとも思うくらい。これはこれでまた別個に考えてみなければならぬ⁵⁾。

筆者はその後、叙事詩『マハーバーラタ』および『マハーバーラタ』の現代インドでの受容状況についての研究をまとめ、『マハーバーラタの世界』（めこん、2006年）を発表した。さらに、『三国志通俗演義』との比較も念頭に置き、『マハーバーラタ』における裏切り』を発表した⁶⁾。

本家インドの『マハーバーラタ』の研究に集中して98年6月の構想をなかなか実現できずにいたが、松本氏の『ワヤン・ジャワ、語り集成』の一読を機に、今回やっとインドネシアのマハーバーラタないし、ワヤンのマハーバーラタと取り組むこととした。本稿には松本氏、氏が率いる日本ワヤン協会の方々との議論や、ワヤン協会によるワヤン諸演目の鑑賞体験が反映されることになろう。

1. 『マハーバーラタ』、ジャワへ

(1) ワヤン・プルウォの誕生

まず、松本の著作に基づき、『マハーバーラタ』のジャワへの伝来、定着の過程を概観しておこう。

『マハーバーラタ』がはじめてジャワに紹介されたのは、東部ジャワ、クディリ国王ダルモウォンソ（在位 991 - 1007 ?）治下のことであった。この時、一部ジャワ語訳が行われた。12 世紀中期には、『マハーバーラタ』のクライマックスをなすクルクシェートラの大戦を描いた『バラタユダの書』が著される。ムプ・スタが書き進め、ムプ・パヌルが完成したとされ、四行詩形式、731 連、2924 行の作品であった⁷⁾。これは原作の翻訳ではなく、翻案であった。『マハーバーラタ』のジャワ化は既にそれ以前、1035 年作の「アルジュノの饗宴」という叙事詩にも確認される。この作品は古代ジャワ文学の傑作とされている⁸⁾。インドの原作の登場人物たちが、当時のジャワ社会の人物群やジャワ人達の祖先に重ね合わされた。

その後、『バラタユダの書』を軸芯として、『マハーバーラタ』のジャワ化、あるいはジャワでの独自の展開は急速に進んだ。かくて、同様にジャワに紹介され、ジャワ化もされた『ラーマーヤナ』とともに、ワヤン・プルウォと呼ばれる独自の芸能ジャンルが形成されていく。ワヤンは「影」、プルウォは「始源」を意味する（おそらくサンスクリット語の *purva* に由来。「古の」「昔の」を意味する形容詞である：筆者）。ワヤンの中でも、『マハーバーラタ』『ラーマーヤナ』など、インドの叙事詩、神話に想を得た演目群をワヤン・プルウォと総称したのである⁹⁾。

ところで、ワヤンは最初から影絵芝居ではなかった。影絵芝居としてのワヤン、即ち、ワヤン・クリの出現は 15、6 世紀のことで、ジャワで活動し始めたムスリムたちによるものであった。イスラームの宣教活動の手段としてそれを開発したのだという。それ以前のワヤンは、絵巻を繰り広げながら、その絵物語に則し、語り手（ダラン）が語る形式であった。これをワヤン・

ベベルと呼ぶ¹⁰⁾。ワヤン・クリはワヤン・ベベルの語りの伝統を引き継ぎ、それをさらに発展させていった¹¹⁾。

(2) ワヤンのマハーバーラタの現状

ワヤン・プルウォにおける『マハーバーラタ』演目群について、松本はこう語る。

そこではもはやインド産マハーバーラタは主要人物の基本的性格、また物語の骨子をのこすだけとなり、ジャワ化のマハバラタはその後に浸透したイスラム神秘主義の影響も含むジャワ独特の人生観や神秘思想をないませ、ふくらんだ物語の細部において、もはや原作のおもかげは影薄いのである¹²⁾。

『マハーバーラタ』に基づく主な演目は200以上に及び¹³⁾、「ジャワで自分がぜひ見たいと願うラコン（演目：筆者）の正式な徹夜上演には、もし特別に依頼するのでもなければ、1、2年待ってもまずぶつかることがないといっている¹⁴⁾という状況らしい。『ラーマーヤナ』の主な演目がおよそ10だというから¹⁵⁾、インドのヒンドゥー教二大叙事詩のインドネシアへの浸透・同化には大きな差がある。松本は言う。

その（つまり『ラーマーヤナ』の：筆者）演目群のジャワでの上演もマハーバーラタのそれにくらべ、意外なくらいに少く、ときに私自身ラーマーヤナからの演目上演をダランに依頼しても、彼らの多くはなぜマハーバーラタでないのかといぶかるのである。舞踊の素材としてはジャワやバリでラーマーヤナの物語が多く採りあげられてはいるものの、ワヤンではさほど人気がないらしい¹⁶⁾。

この理由について松本は、『マハーバーラタ』における王位継承をめぐる

同族戦争の物語と、中部ジャワの4つの王家の兄弟戦争がジャワの人々に二重写しになったからではないかと解釈している。「自分たちの尊敬する王家の争いが、まだなまなましく感じられ、それだけに『マハーバーラタ』の壮大な物語が身近なものに思えるのではないのでしょうか」¹⁷⁾。松本邸での数度に及ぶ筆者との議論においても、ワヤンにおける『ラーマーヤナ』に比しての『マハーバーラタ』偏愛の理由として、松本はしばしばこの点を強調していた¹⁸⁾。

ワヤンは影絵芝居であるが、その真の本領は語りにあるという。「ワヤンはインドネシアでは見るものではなく聞くものなんです。いいダランだと5000人も入るような会場で演じることもありますよ。もっとも（影絵の：筆者）人形は人形でやはり、風情がありますけどね」¹⁹⁾。

ワヤンは影絵操作を伴う語りの芸能であり、「つねに異説異聞にとりまかれている。ダランの数だけ、さらには一回性をもつ上演の性質上、上演の数だけ異説異聞が増幅されるとさえいえる」²⁰⁾。キ・ナルトサブドは高い文学性を持ち、キ・マンタプは人形操作が際立つが、文学性にはやや欠けるなど、著名なダランたちにはタイプの違いもあるという²¹⁾。

同じくジャワのワヤンではあっても、ソロ・スタイル、ジョクジャ・スタイルなど、地域差もある²²⁾。

なお、現在、ジャワの伝統的なワヤンは、通常、夜9時頃から夜を徹し、朝5時まで8時間をかけて3部構成で上演される。しかし、多くの場合、各演目の本筋、主題が明確に展開されるのは、やっと第3部（おおよそ午前3時—5時）においてである²³⁾。

現在のような内容で書物の形態にまとめられたのが一般に西暦400年頃とされるインドの『マハーバーラタ』に対し、インドネシアのワヤン・プルウォのマハーバーラタは、ジャズの即興演奏のように、時として録音が残されることはあるものの、基本的には、その夜限り、その瞬間限りで消えていく芸能である。インドの原作を念頭におきつつ、ワヤンのマハーバーラタについて検討していく本稿において、この点はもちろん、最初に留意しておく

べきことである。

この節の最後にインド版とインドネシア版の人名対照表を掲げる。インドネシア版の登場人物の名前は、インド版のその名残は残しつつも、インドネシア風に変化している。ここでは主要登場人物のみを掲げる²⁴⁾。

(パランダヴァ五王子陣営)		(カウラヴァ百王子陣営)	
インド	インドネシア	インド	インドネシア
ユディシュティラ	ユディスティロ	ドゥルヨーダナ	ドゥルユドノ
ビーマ	ビモ	ドゥッシャーサナ	ドゥルソソノ
アルジュナ	アルジュノ	ビーシュマ	ビスモ
クリシュナ	クレスノ	ドローナ	ドゥルノ
クンティー	クンティ	カルナ	カルノ
ドラウパディー	ドルパディ	シャリヤ	サルヨ
アビマニユ	アビマニユ	シャクニ	スルクニ
ガトートカチャ	ガトゥコチョ	ドリタラーシュトラ	ダストロストロ
シカンディン	スリカンディ	ガンダーリー	グンダリ

2. クレスノとブトロ・グル

(1) ブトロ・グル

ワヤンのマハーバーラタは、インドの『マハーバーラタ』からパランダヴァ（インドネシアではパランダワ）五王子とカウラヴァ（インドネシアではコラワ）百王子の王位継承権をめぐる同族戦争の物語であるという大枠は引き継いでいる。さらにクリシュナ（クレスノ）が物語を、あるいは登場人物たちの運命を支配するといった点も両者共通である。

ただし、インドネシア版では、実はクレスノの背後にさらに高位の黒幕が設定されている。ブトロ・グル (Betara Guru) である。98年5月に『マハーバーラタの蔭に』をはじめ一読して、最も印象的だったのは、このキャラクターの存在であった。まずこの得体の知れない神について考えてみなければならない。松本亮はブトロ・グルについてこう紹介している。

宇宙支配の神。通常神格をしめすブトロを冠して、ブトロ・グルという。神々の住む天界カヤンガンの中核…に在って、地上の不穏つまり天界に脅威を与えるものの気配を敏感に察知し、これを平穏ならしめようと願う。一方その早とちり、浅慮が世の混乱を招く結果をひき起こしめる。インド神話におけるシヴァのジャワでの姿なのだが、ここでは絶対神としての神格の面影はなく、人間にも劣る愚鈍さかげんを多くみせる。その軽拳がワヤンの多くの演目に混乱の種をまき、ドラマは光彩を放って展開する。例えばマハバラタにおける悲惨な大戦バラタユダ…もまた彼の仕組んだもので、彼は上天の高みから人間の戦いを観て、悦に入るとされる。こうしたブトロ・グルの性格の中にヒンドゥーの至高神をひきずりおろそうとしたジャワのイスラム神秘主義の理念が見える²⁵⁾。

インドの『マハーバーラタ』は、何と言ってもクリシュナと非合理的な運命の力の二つを推進力として展開している²⁶⁾が、その他にも多くの神々、聖仙などが物語に関与し、物語を動かしていく。クリシュナの本体とされるヴィシュヌと並んで、ヒンドゥー教三大神の一人シヴァも、『マハーバーラタ』世界の成立に少なからぬ貢献をしている。解釈のしよによっては、『マハーバーラタ』におけるシヴァの役どころをクリシュナの上位に置くということも、全く不可能とは言い切れまい。

それにしてもワヤンのマハーバーラタの全体に渡って、明確にクレスノの上位にブトロ・グルを配したこの構造は、やはりユニークと言わざるをえない。インドのシヴァがジャワでブトロ・グルと呼ばれるようになった経緯も不明である。これは、カルナがカルノに変わるといったインドネシア訛とは別次元の話である。インドでヒンドゥー教の神々は、有力であればあるほど、おびただしい別名、愛称を持つのが通例だが、筆者はブトロ・グルに近いシヴァの別名、愛称を、今のところ、確認できないでいる。

なぜ、シヴァにあたる神格がジャワではクリシュナにあたる神格の上位に

置かれたのか、なぜその名は、シヴァとは似ても似つかないのか、ここでは謎は謎のままとしておくしかない。とにかくワヤン・プルウォの世界ではそうなっていて、そのことがワヤンのマハーバーラタに独特の色彩を施している。プトロ・グルの人間に対する態度は、まことに苛酷、傲慢で、イスラームの宣教活動のため、そのような神観念が造形されたという松本の理解は納得できる。

なお、既に述べたように、インドの『マハーバーラタ』は、主としてクリシュナと非合理的な運命の力の二つを推進力として展開している。後者は非人格的な力である。ワヤンのマハーバーラタには、後者は存在しないようである。ヴェーバーによると、後者は、古代ギリシャや春秋戦国時代の中国、さらには『マハーバーラタ』などの中に存在し、戦士階級・騎士階級を主たる担い手とした。それは、「あらゆる種類の宗教的ないし純倫理的な合理主義とのあいだ（で）…深い緊張関係」に立つものであった²⁷⁾。インドでは、こうした種類の運命観は、「宗教的合理主義」としての三大神の信仰の隆盛などにより、次第に目立たなくなっていったが、完全に消失することはなかった²⁸⁾。あれもこれも抱え込むインドの多神教的環境とも関わりがあるう。

ワヤンの背景をなすインドネシア社会は、イスラーム化され、イスラームという「宗教的合理主義」の支配下にあった。イスラームは、人格神アッラーに絶対無条件的に服従あるいは帰依する宗教である²⁹⁾。イスラームの教義では、宇宙の全てをアッラーが支配する。そこに、それ以外の強大な力、たとえば、非人格的運命の力などが入り込む余地はないのである。ワヤンのマハーバーラタが、人間たちの運命を定めるのは、プトロ・グルであり、クレスノであり、いずれにしても人格神であるとしたのは、「全てを取り仕切る一人の神」というイスラームの神観念の影響にもよったのかもしれない。

イスラームから見て、非人格的運命も、異教の神々たるプトロ・グル、クレスノも、ともに胡散臭い存在だったとしても、後者の方が、まだしも「宗教的合理主義」という共通項を持っていた分、与し易かったということだろ

うか。こうして、ワヤンのマハーバーラタからは、インドの『マハーバーラタ』には濃厚に見られた非人格的運命の観念は消失して行ったのではないか³⁰⁾。

そこでワヤンのマハーバーラタとプトロ・グルの関わりを具体的に見ていくとしよう。「ジタブソロの書」がキーワードとなる。バラタユダつまり、インド版のクライマックスであるクルクシェートラの大戦と、そこへ至る様々な因果は、実は、プトロ・グルを中心とする天上の神々が、退屈しのぎに作り出した筋書だった。『マハーバーラタの蔭に』から、その筋書作りを楽しむ神々の様子を見てみよう。

天界ではいまや神々の会議が行われている。舞台は宇宙支配の神プトロ・グルの居城…、伺候するはプトロ・グルの代行神ナロド、書記プニヤリアン、天界守護の神インドロ、火神プロモらである。雲の上の神々は戦争がお好きなのだ。バラタユダが相闘われねばならぬ運命を仕組んだ者は実は彼らであり、いまや策略功を奏して、地上最大の見世物（ショー）の開始にあたり、嬉々として、地上の英雄らのカードを散らし、一騎討の相手同士を決めようとしているのだ。ここに決定され、神の気まぐれのままに、ノートに一度書きこまれるや、もはや変更はならない。戦う相手の決定ばかりか、いずれに軍配が挙がるかまでが書きこまれる。バラタユダの命運の行くえはこの一冊の書ジタブソロの筋書をひたすらに追うのみとなる。…

神々の楽しいな審議はつづき、すべてはプトロ・グルの発案通り、書記はつぎつぎに運命の対決をしるしつけてゆく。羽根ペンはすばやくインク壺を往復する。セト対ビスモ＝セトの死、スリカンディ対ビスモ＝ビスモの死、オンコウイジョヨ（アビマニュの別名）対アスティノ軍団＝オンコウイジョヨの死等々³¹⁾。

ここでプトロ・グルと共に戦争の筋書を考えている神々を確認しておこ

う。火神ブロモ (Brama)。ヴィシュヌ、シヴァと並ぶヒンドゥー教三大神のもう一人、ブラフマーに由来する神と思われる。松本によるとブロモにはブラフマー的性格はないとのことだが³²⁾。インドロ (Endra)。インドで三大神の信仰が盛んになる前のヴェーダ時代には、神々の王としてその頂点にあったインドラに由来すると思われる。三大神の信仰が盛んになった後も、インドラはヒンドゥー教の神々の序列第4位に位置していたと言ってよい。「神々の神」とされた三大神とは一つ次元が違う「格落ち第4位」とでも言うべきものではあったが。

シヴァにあたるブトロ・グルとブラフマーに由来するブロモ、インドラに由来するインドロ。ヒンドゥー教のそうそうたる神々が、マハーバーラタの悲劇の筋書の創作を楽しんでいたということになる³³⁾。

(2) クレスノ

三大神にはもう一人、ヴィシュヌがいるが、これのインドネシア版ウイスヌは、なんとブトロ・グルの息子とされている。しかし、正義の神、化身の神という属性は失われていない³⁴⁾。正義の神としては、戦争・悲劇の筋書作りは性に合わなかったか、ここの神々の会議には参加していないようだ。ただし、ウイスヌが入魂したとされるクレスノ³⁵⁾が、会議の場に乱入してくる。

対決の組合せはほとんどを終了しようとして、ブトロ・グルはなお言葉をついでいう、「オントセノ対ポロデオ」と。まさに書記がその名を書きとめた時、一匹の白蠅がどこからともなく飛来して傍のインク壺を蹴倒す。インクは黒々と「オントセノ対ポロデオ」の文字の上に汚みとなって流れた。この白蠅こそ、身を変えて、ジタブソロの書の始終を監視していたクレスノの魂スクモ・ウィチヨロであり、その姿を見破られた彼はブトロ・グルの怒りに触れ詰問される。「そなたはなぜ神々によるバラタユダの組合せに邪魔を入れたか」と。スクモ・ウィチヨロ

はいう、「私はわが兄ボロデウォとオントセノの対決が不満なのです。ボロデウォには勝ち目がなく、それどころかオントセノはあまりもの超能力ゆえ、たちまちに勝敗は決して、バラタユダそのものも成立することがないでしょう」と。さらにスクモ・ウィチヨロが細目をしるしたジタブソロを申し受けたいといえ、プトロ・グルはそなたのもつ死者を蘇生せしめうるウィジョヨクスモの花と引き換えならば、と応じる³⁶⁾。

交渉は成立し、以降、クレスノは、ワヤンのマハーバーラタの諸々の演目の狂言回しとなる。「神々の仕組むバラタユダの筋書…を手に入れることで、クレスノはバラタユダの決定的な帰趨、その経過の細目をことごとく透視しながら、事をその筋書どおりの運びに導き入れる男となるのである。…バラタユダのあらゆる細部にあつてつねに醒めた人間であり、一切は神の摂理だと説きつづける。…予見される戦いの筋書を見詰める身にはもはや人間の血は通わぬ」³⁷⁾。

ワヤンのマハーバーラタの脚本を書き、プロデューサーをつとめたのがプトロ・グルだとすれば、クレスノはディレクターをつとめたということになるだろうか。松本の著書からは、なぜクレスノがその役目を引き受けたのかは必ずしも明らかではない。至上神、宇宙支配の神プトロ・グルの意を体現しようとしたということか。ともあれ、この結果、クレスノの物語における役回りは、インドの『マハーバーラタ』のクリシュナと近いものとなる。

なお、ボロデウォは『マハーバーラタ』ではバララーマ、別名バラデーヴァである。インドの原作では、カウラヴァにも同情的な人物として描かれているが、クルクシェートラの大戦には、中立を貫いた。インドネシア版では明確にコラワ寄りとされ、大戦でもコラワ方に立って戦おうとしていたとされている。オントセノはインドの原作にはない登場人物で、ビモの息子とされている。この二人の対決をプトロ・グルは見たいと思ったのだが、クレスノがそれを阻止し、さらに策を用いてボロデウォが大戦に参加しないようにしたのだった³⁸⁾。

ともかく、プロデューサー、脚本家のブトロ・グルとディレクターのクレスノの協働により、ワヤンのマハーバーラタの諸々の悲劇が展開されることとなる。この二人の神は人間に対し、まことに苛酷極まりない。インドの原作でも、登場人物たちは大変な悲劇にあえぐ。そこにクリシュナが深く介在している。クシャトリア達を滅ぼすことこそがクリシュナの使命であったのだから。しかし、そこには傲慢になったクシャトリアたちを滅ぼし、徳高いクシャトリアたるパーンダヴァ五王子とその末裔、バラモン達に新しい世界をゆだねるという一応の大義名分があった。これに対し、ワヤンのマハーバーラタでは、神々の単なる気まぐれ、退屈しのぎに、登場人物たちは苦しみ続けなければならないのである。そうした枠組の中で物語は展開する。

(3) ブトロ・グル、クレスノのインドにおける淵源？

実はインドの『マハーバーラタ』の中にも、こうした神観念に近いものが登場している。それはパーンダヴァ五王子がサイコロ勝負に負けて国を追われ、森で暮らしていた時のユディシュティラとドラウパディーの対話に出てくる。この神観念につき『マハーバーラタ』の研究者ピーター・ヒルは、同叙事詩に見られるカルヴァンの予定説の神に近いものについての「最も充実し、最も熱情的な議論」³⁹⁾としている。

サイコロ勝負でユディシュティラに賭けのかたにされ、カウラヴァ方にひどく辱められたドラウパディーは憤懣やるかたない。彼女は夫ユディシュティラにも批判的だが、それよりも彼女にはカウラヴァ方と自分達の境遇がいかに不公平に思える。有徳に振舞ってきた自分達が流刑の身をかこち、悪の限りを尽くしてきたカウラヴァ方がわが世の春を謳歌している。ドラウパディーはこの「神義論問題」への回答として次のような思想を語る。

主である創造者（Dhatri、配置者：筆者）のみが実に、生類の苦楽、幸不幸に関して、すべてを配置するのである。…木製の人形が操られて手足を動かすように、これらの生類も[創造者に操られて]手足を動か

す。…この世の人は糸につながれた鳥のように抑制されている。主宰神（Ishvara）の支配下にあつて、他人の主でもないし自分の主でもない。…人間は無知であり、自分の幸不幸をも支配することはできない。…彼はその幻力により迷わせて、生類により生類を殺すのである。…聖なる神は欲するがままに、結びつけたり離したりして、子供が玩具で遊ぶように、生類を用いて遊んでいる。…気高くて徳性の高い謙虚な人々が生活に苦しみ、卑しい人々が幸福なのを見ると、考えこんで当惑してしまいます。あなたのこのような不幸とスヨーダナ（ドゥルヨーダナ：筆者）の繁栄を見るにつけ、…この不正を見逃している創造者を私は非難します。…もしなされた業がその行為者に従い、他のものに行かないなら、必ずや主宰神は、彼がなした悪業で汚れるでしょう⁴⁰。

「聖なる神は欲するがままに、結びつけたり離したりして、子供が玩具で遊ぶように、生類を用いて遊んでいる」。ワヤンのマハーバーラタにおけるプトロ・グルの姿は、このインドの原作の「生類で遊ぶ残忍な神」をもとに造形されたものなのかもしれない。ドラウパディーによって語られたこの陰鬱な神観念がワヤンのマハーバーラタ全体の枠組を決することになったのかもしれない。

さらに言えば、プトロ・グルはマハーバーラタ関連演目以外のワヤン・プルウォにおいても強烈な狂言回しとして君臨している⁴¹。上述のユディシュティラとドラウパディーの対話ないしドラウパディーの神観念は、ワヤン・プルウォ全体の世界観を決する重要な淵源だったのかもしれない。しかし、ここではこの点に関する『マハーバーラタ』→ワヤン・プルウォの継承関係を実証することはできない。問題の所在を指摘するにとどめておく。

ところでドラウパディーの神観念とクリシュナの関係はどうなのだろう。ヒルは配置者、制定者（Vidhatri）と呼ばれる前者の神観念につき、こう語る。「配置者、制定者は、シヴァ、ヴィシュヌ、クリシュナ、ブラフマーなどの偉大な神々の単なる仇名である」⁴²。クリシュナはこの神観念と無縁で

はないとするのである。なぜこうした「仇名」が用いられたのか。ヒルはこう考える。しばしば不合理で苛酷な運命を人間たちに課する「自らの信奉する至上神をとがめることを嫌った献身者たちが、ほとんど変装になっていない（そうした）仇名を用いたかのようである」^{43）}。

ヒルの解釈は首肯できる。バーンダヴァを除くクシャトリヤ階級の絶滅を「使命」とし、卑劣な手段も辞さず、多くの悲劇を見つめながら『マハーバーラタ』の登場人物たちを操り、翻弄したクリシュナの姿は、彼なりの大義名分によるものだったとはいえ、操られ、翻弄された人間たちからは、「生類で遊ぶ残忍な神」ととられても仕方のない面を持っていた。ワヤンのマハーバーラタにおけるクレスノが、正に「生類で遊ぶ残忍な神」として描かれ、大義名分を持たないプトロ・グルと組んで酷薄な悲劇のディレクターとして振舞ったことも、その延長上にあろう。

インドのクリシュナは、『マハーバーラタ』において、『バガヴァッド・ギーター』などの場面で、その真の姿を示すとして巨大な姿に変身してみせることがある（その巨大な姿を Vishvarupa という）。ワヤンのクリシュナであるクレスノも巨大に変身することがあるのだが、その際、それが「巨大なラクササ」^{44）}とされている点も興味深い。ラクササはインドのラークシャサ（rakshasa）。魔物である。クレスノの得体の知れない本質を示すための趣向として、よくできていると言えよう。

(4) スマル、サン・ヤン・トゥンガル

プトロ・グル、クレスノ。ここまでワヤンのマハーバーラタを動かす二人の強大な神について見てきたが、実はワヤン・プルウォにはもう一人、強烈な存在感を示すキャラクターが存在する。スマルである。ここでこのスマルについても触れておくべきだろう。松本亮『ワヤン人形図鑑』にスマルの姿をさぐってみよう。

真の姿はイスモヨとよばれ、かつて兄トゴグ…、弟グル…とともに、

サン・ヤン・トゥンガルの息子として天界にあった。しかし父から地上に降り、形をなさぬ姿に身をかえ神の子孫である人間たちを守護することを命じられる。多くの場合アルジュノ…の従者として笑いをふりまき、また精神性を説く。(醜い姿をし：筆者) 瘤状の前髪で天界とのかかわりをたもちながら、地上の愚かさに手をやいては、早く天界へ戻り、もとの美男子にかえりたいと訴える。ふだんは滑稽を売りものに、息子たち三人とともに愚鈍をよそおうが、いざというときは強烈な神格を発揮し、怒ればいかなる王、神、グルでさえ、彼には頭があがらない。…いつも離れぬ三人の息子たちとともにプノカワン（仲のいい仲間の意）とよばれる。彼らのごく一部のラコンを除いて、あらゆるワヤンに登場する⁴⁵⁾。

「弟グル」とは、プトロ・グルである。宇宙を支配する神には兄がいたのである。普段は醜い姿で地上で道化をあいつとめていたが、いざとなれば弟プトロ・グルをもしのぐ力を持つ⁴⁶⁾。両性具有神である⁴⁷⁾。一種のトリックスターと言ってよかろう。スマルと三人の息子たち、ガレン、ペトル、バゴンからなるプノカワンは、ジャワの人々に深く愛され、プノカワン理解がワヤン理解の最大のポイントとさえ言われるという⁴⁸⁾。スマルを中心とするプノカワンの存在は、インドの『マハーバーラタ』には対応するものがない。その存在はワヤンのマハーバーラタに独特の味付けを施している。スマルの兄トゴグには、二人の弟ほどの存在感はないようだ。

実は、ワヤン・プルウォの世界にはさらにもう一つ奥が設定されている。上記『図鑑』のスマルの説明にも登場したスマル、プトロ・グルの父サン・ヤン・トゥンガルである。この神は他にもサン・ヤン・ウェナン、サン・ヤン・ヌルチャハヤの名を持つが、謎の神である。「常人の目には見えぬものだとの約束のもと、悪魔も妖怪も亡霊も人形としてきっぱり図像化されているワヤンの世界にあって、この神だけは決してすがたをみせることがない。その存在を知らせる唯一の方法は聖なる光芒としてのワヤンである。…ほと

んどの場合、ダランの口を通して、その存在が知らしめられるだけである」⁴⁹。

この謎の神は、宇宙支配の至高神プトロ・グルよりもさらに高位であると認識されているらしい。松本は明言していないが、息子スマルを意のままに動かしているのだから、「いざというとき」のスマルよりもさらに強烈・強力な神でもあるのではないか。この神について松本はこう語る。

恐らくはヒンドゥ・ジャワ時代のワヤンの世界にあっては、こうした神は必要なかったはずであり、シヴァとしてのプトロ・グルがその絶対権を握っていたはずである。…だがここでは二重写しではない。それはシヴァを離れて、はるかな高みに厳然と位置している。ここに、シヴァの神格を細心の意をはらいながら曳きずりおろすことに成功したジャワの歴史的経過が見えてくるのだ。

他にもない。イスラム教の渡来がそれであり、ワヤンを利用してイスラム教を布教していった経過がそれを果たしたと考えて無理がない。それは…人によってはアッラー、多くは、大いなる祖霊と判断される神なのである。ヒンドゥ・ジャワの伝統を利用しながら、徹底してワヤンをイスラム教布教の具と化し去った使徒たちのプトロ・グルへの態度が、ここに明瞭に読みとれるのである。かわらずワヤンにおける至高神の地位を与えたままに、その神格をひたすらに人間の位置にまでひきずり降ろす⁵⁰。

松本の文章には若干、不明瞭な点があるが、サン・ヤン・トゥンガルこそ、ワヤンの世界の真の最高神、絶対者とされ、クレスノ、プトロ・グル、スマルのさらなる高みにいるということになるようだ。そしてそれにはイスラムの唯一絶対神アッラーの面影があるという。「大いなる祖霊」についてはここでの深入りは避けたい。

ワヤンのマハーバーラタの脚本家・プロデューサーとして、インドの『マハーバーラタ』の中心的推進力クリシュナにあたるクレスノを凌駕するブ

トロ・グルのさらに高みに、スマル、究極にはサン・ヤン・トゥンガルを配するというこの構造、在来信仰の上に、インド化、イスラーム化を経たインドネシアの重層的歴史を反映しているということのようだ。この独自の構造が、インドの原作とワヤン版の第一の決定的な差異ということになるだろう。

我々はここで、ムスリム人口が総人口の86.1%⁵¹⁾を占めるイスラーム世界インドネシアで、現在世界最強の多神教とも言えるヒンドゥー教の大叙事詩に取材した物語が息づいているというこの逆説的状况をもう一度確認しておくべきだろう。

3. ビーシュマ、カルナの変容

ビーシュマ、カルナは全体の色調を運命の悲劇と規定できるインドの『マハーバーラタ』にあって、その悲劇性を代表する二人の英雄である。ワヤンのマハーバーラタにあって二人が悲劇の英雄であり、代表的登場人物であるという大枠は変わらない。しかしインドのクリシュナとインドネシアのクレスノの役どころが少なからず異なっているように、インドのビーシュマ、カルナとインドネシアのビスモ、カルノの間にも変容の跡は小さくない。この章では、ビスモ、カルノについて検討していきたい。

(1) ビスモ

インドの原作では、ビーシュマは父王の再婚を成立させるため、生涯不婚の誓いを立て、また生涯父の王国に忠誠を尽くすことをも誓い、あらゆる苦難にもかかわらずそれらを守り抜いた文武両道に秀でたとびきりの人物とされている。このビーシュマが自らの誓いに縛られて、最も惨めな姿をさらすのがカウラヴァとパーンダヴァのサイコロ勝負の場面である。

いかさまの名人シャクニはユディシュティラの賭けるすべてのものを巻き上げていく。宝石、馬、召使、遂には王国、さらに自分の弟たちさえ、理

性を失ったユディシュティラは賭け、そして失っていく。ビーシュマ最愛のアルジュナさえ今は奴隷とされてしまった。ユディシュティラは自分自身も賭け、そして失う。相手の挑発に乗り、とうとう五王子共通の妻ドラウパディーさえ賭けて失う。ビーシュマは呆然とこの様子を見守るだけだった。満座に引き出され辱められるドラウパディー。彼女は必死で、勝負の不当さを訴える。既に奴隷の身分に落ちていたユディシュティラがどうして他の人間を賭けることができるのかという鋭い論理を振りかざす。ビーシュマは力なく答える。

美しい女よ、法は微妙であるから、私はあなたの問いに適切に答えることはできない。自己の財産を持たぬ者は他者の財産を賭けることはできない。しかしまた、女性というものは夫の支配下にあると見て…。ユディシュティラは繁栄する全地上を捨てるとも、真実を捨てないであろう。そして彼は、『私は勝ち取られた』と告げた。それ故、私はこの問いに答えることができない。シャクニは人々の間で、賭博にかけて無敵である。彼はユディシュティラを自由意志に任せた。その偉大な男はそれが詐術であると考えなかった。それ故、私はあなたの問いに答えられない⁵⁹⁾。

ワヤンのマハーバーラタでは、ビスモをこうした情けない役回りから解放している（少なくともそのように語る有力なダランがいる）。ビスモはドゥルユドノとスルクニの奸計は知っていたものの、パンダワが全てを失うような結果になるとは予想もせず、サイコロ勝負の会場にではなく、別室にこもっていたということになっている。「わしは、そのように争う孫たちのありさまは見たくもない。この場を去ることにしよう」⁵⁹⁾との言葉を残して。ビスモは、既にパンダワが国外追放となった後、サイコロ勝負の惨憺たる結果を知る。ドゥルユドノ、スルクニ、ダストロストロらを激しく責めるが、どうにもならない⁵⁹⁾。

しかし、サイコロ勝負前後の場面のビスモは、インドのビーシュマよりはるかに堂々と振舞っている。インドの原作の設定とは異なり、サイコロ勝負の戦利品として、コラワ方に留め置かれたドルパディを見るや、ビスモはドゥルユドノに彼女をくれと迫る。「アスティノ国王よ、どうじゃな、許可されるか。だめならばそれでもよい、だが許可されたならば、わしが何のために使役しようが、そなたは妨げるわけにはゆかぬ。わしは彼女を飯炊き、水汲み、あるいはベッド掃除人、必要とあらば妻にするかもしれぬ。わしは年寄りだとて、その方の欲望はまだ若者とはかわらんのだじゃ」。こうしてドルパディをドゥルユドノから解放したビスモは、ユディスティロにドルパディを与える⁵⁹。

インドの原作では、カウラヴァの非道を見過ごしにしているとドラウパディーになじられもしたビーシュマだが、ビスモは、ドルパディを解放し感謝される形で、サイコロ勝負前後のエピソードを締めくくっている。生涯不婚を誓ったビスモに、「その方の欲望はまだ若者とはかわらんのだじゃ」と言わせているのは、これを演じたダランの遊び心だろう。

ビスモをサイコロ勝負の場面の惨めな役回りから解放することで、インドのビーシュマより、ビスモの英雄性、善良性はより純化されていると言ってよいであろうか。そのことはビスモの悲劇性をビーシュマのそれより純化することになっているとも言えようか。同様のことはカルノについても言えそうだ。

(2) カルノ

カルノについてもサイコロ勝負の場面の姿は、インドのカルナのそれとは異なっている（これも、少なくともそのように演じる有力なダランがいる。以下、同様）。インドのカルナは、同場面で、カウラヴァの戦利品となったドラウパディーを、百王子たちとともにさんざんになぶる。こんな調子であった。

ドゥフシャーサナは、哀れな夫たちを見つめているクリシュナー（＝ドラウパディー：筆者）を見て、激しく彼女を揺すぶり、ほとんど気を失わんばかりの彼女に、「奴隷女め」と言った。冷酷に、薄笑いを浮かべて。カルナは、その言葉を殊の外に喜び、声をあげて笑いながら誉めそやした⁵⁶。

「また、彼女が一衣のみで集会場に連れて来られたことを非法であると考えるなら、その点についても、私のすばらしい言葉を聞け。…女性は一人の夫を持つと神々に定められた。しかし彼女は多くの夫に従っているから、まさしく娼婦である。彼女を集会場に連れて来たのは不思議ではないと私は思う。一衣であろうと、全裸であろうと…。彼女はパーンダヴァたちの財産であり、彼らはシャクニによって合法的に全財産を勝ち取られたのだ。…パーンダヴァたちとドラウパディーの着物をはぎ取れ」⁵⁷。

若き日、ドラウパディーのスワヤンヴァラ（婿選び式）に参加し、課せられた難題をなんなく果たして、ドラウパディーを手に入れようとした時、「私はスータ（御者）の息子を夫にはしたくない」と満座で辱められ、拒否された恨みからでもあったろうが、『マハーバーラタ』の登場人物の中でもインドでとりわけ人気の高いカルナ⁵⁸に傷をつけるエピソードではあろう。

もっとも、クルクシェートラ大戦直前にクリシュナーから自らの出生の秘密を聞かされた時には、カルナは、「私はドゥルヨーダナのために、パーンダヴァたちに対して辛辣な言葉を言ったが、今その行為により私は苦しんでいる」⁵⁹と前非を悔いている。逆境ゆえに、結果的に悪いこともかなりやっているが、最後は浄化されたかに見えるカルナのこうした姿にこそ、インドの多くの人々は、必ずしも奇麗事だけでは生きられないわが身を重ね合わせ、共感を寄せるのかもしれないが。

ワヤンのカルノはサイコロ勝負の場面には居合わせないようだ。『ワヤ

ン・ジャワ、語り集成』で紹介されたキ・ティンブル・ハディプライトノによる1970年代に録音された「パンダワの骰子賭博」では、勝負の場でカルノが発言することは一切ない。当然、ドルパディへの暴言もカットされている。前述のインドのカルナの負った最大の傷は、カルノのものではない。ビーシュマとビスモの関係同様、カルナ→カルノと、英雄性、善良性を高め、同時にその悲劇性をもより強調するという演出になっているようだ。

サイコロ勝負の場面以外でも、カルノはカルナにはなかった顔を見せている。クル・カセトロ（インド版のクルクシェートラ）の大戦直前、クレスノはカルノにその出生の秘密を告げ、パンダワ方につくように迫る。カルノはこれを断る。インド版では、恩義のあるドゥルヨーダナを裏切れないからというのが理由だが、ワヤンのカルノは違っている。『マハーバーラタの蔭』からそのくぐりを見てみよう。

カルノは苦悩を胸におさめながらいう、「私はわが弟たちパンダワに敬意を表する。クレスノよ。私は私を産んでくれた母に敬意を捧げる。しかも私にはバラタユダの帰趨は読める。しかしながらなお私はコラワに従うことになるでしょう。身の素性も知れぬに一国の王にとりたててくれたドゥルユドノを裏切るのは武将の道でなく、さらに言えば私には別の考えあつてのこと。私にはわかる。明日のバラタユダに勝利するのはパンダワだと」⁶⁰⁾

ここまではインド版でのカルナのクリシュナへの発言と基本的に違いはない。しかし、よく読んでみると、「私には別の考えあつてのこと」と謎めいた発言をしているのが気になる。この「別の考え」こそがカルノにカルナにはなかった属性を付与するものであった。

クレス（ママ）は詰問する、「おお、パンダワが勝利し、コラワが敗れると知って、なぜそなたはあえてコラワに従うのか」と。カルノは応

える、「プラブ・ドゥルユドノにあえてバラタユダの戦いを戦うよう、私はつねにそそのかしつづけてきたのです。このカルノ一人さえ生きてあればパンダワ何する者ぞと。私はドゥルユドノを戦いへと駆りたてつづけてきた。もし私がそうせぬなら、もし怯懦のドゥルユドノがバラタユダを回避しようなどとしたならば、パンダワは永久にアスティノ国はおろかインドプラストも手中にすることならず、その強欲はなお地にはびこり、世の悲惨の失せることはありますまい」と。その言葉に、クレスノはカルノを抱擁する。身はコラワにありながらもパンダワを思い、世の強欲の象徴たるドゥルユドノを身をもって失せしめようとの固い決意に貫かれたカルノの思念に、クレスノは身のふるえんばかりの感動にさそわれたのである⁶¹⁾。

松本に「もはや人間の血は通わぬ」⁶²⁾と評されたクレスノが、「身のふるえんばかりの感動にさそわれた」のだから、尋常ではない。カルノは正にこの発言・態度によってこそ、インドネシア人の心のヒーローとなる。インド版のカルナからの英雄化、善良化もここに極まる。であればこそ、その悲劇の調べも限りなく純化されたものとなる。松本はこの点につき、次のように総括する。

いわば悪役に徹しつづけ、ドゥルユドノへの恩義を裏切ることはならぬとするあたりまでのカルノの態度はインド伝来のものだが、みずから悪に徹しつづけることによってしかドゥルユドノを戦いの場におびきだし、大地に埋めることかなわぬとする見解は、ワヤン・プルウォにおけるダランの創意によるものである。身を捨てて大義につこうとするカルノをみずから創出して、ダランは高く讃え、カルノはこの姿勢によってジャワの多くの人びとの亀鑑として広く評価される⁶³⁾。

ビスモ、カルノがインド版のビーシュマ、カルナに比し、より純化された

英雄とされ、より善良化され、悲劇性もより純化されたことの裏側には、ブトロ・グルの悪辣さをより強調しようとの狙いも込められていたのだろうか。

4. その他の登場人物たちの変容

クリシュナ、ビーシュマ、カルナに限らず、ワヤンのマハーバーラタにあつては、主要登場人物で、その人物像、人間関係にインド版からの目立った変容を伴わない者は基本的にいないと言ってよい。ここで特に目立つ事例をいくつか紹介しておこう。

(1) 脇役シャリヤ、存在感を増す

インド版のシャリヤは、クルクシェートラの大戦にあたって、パランダヴァの双子の四・五男を産んだ妹（あるいは姉）マードリーの縁から、当然、パランダヴァ方につくつもりだった。しかし戦場へ向かう途中、ドゥルヨーダナにだまされて言質を取られ、カウラヴァ方に立って妹（姉）の息子たちを含むパランダヴァ方と殺し合いをするはめになってしまった。シャリヤは、こうしたちょっと間抜けなキャラクターとして描かれている。ビーシュマ、ドローナ、カルナが倒れた後、カウラヴァ方の第4の総司令官を1日だけつとめるが、率直に言って、あまり華のない脇役的な登場人物と見てよかろう。

ところが、ワヤンのサルヨの設定は大幅に異なるものとなっている。やはり脇役ではあろうが、より華のある登場人物となっている。「いったいにモンドロコ国王サルヨにかかわる物語ほど、多くの書、多くのダランによってみごとに詠いあげられ、語りつくされたものも稀である」⁶⁰。

サルヨには3人の娘エロワティ、スルティカンティ、バヌワティがいて、何とそれぞれポロデウォ（バララーマ）、カルノ、ドゥルユドノの妻となっている。インドのシャリヤの娘はこの3人の英雄たちの誰にも嫁いではないな

い。おしどり夫婦カルノ・スルティカンティは悲劇的な死を迎え⁶⁵、ドゥルユドノに嫁いだもののアルジュノが「真に惚れぬいた唯一の女性」⁶⁶ともされる絶世の美女バヌワティは、ワヤンの人間模様を陰影に富んだものとする。インドネシア版シャリヤたるサルヨがなぜ、これほどの人間関係の起点として設定されたのか、理由は不明だが、印象的である。

娘を通した人間関係の華やかさだけがサルヨの特記事項ではない。サルヨとその妻スティヨワティの物語こそが、サルヨの存在感を強めている最大の要因である。

サルヨは聖僧バガスパティの娘ブジョワティ（後のスティヨワティ）と結婚するが、義父バガスパティがラクササであることを恥じ、その同意を得て殺害する⁶⁷。重苦しい展開だが、「娘の永遠の至福と引換えに生命を娘婿に与えた父の子として、スティヨワティはその夫の激しく一徹で、しかもパンダワへの想いとコラワのあいだにあって揺れ動く心情をいたわり見詰めながら、貞節の限りをつくす」⁶⁸。二人の夫婦愛が細やかに詠い上げられる。スティヨワティはクル・カセトロの大戦で夫が戦死した時、必死でその亡骸を探し出し、懐剣を胸に刺し、夫の遺骸に重なる形で息絶える⁶⁹。

ワヤンのマハーバーラのインドの原作との顕著な相違の一つは、前者において男女の愛の描写がより豊富で細やかであるということである。サルヨとスティヨワティの印象的な物語の他にも、前述のカルノとスルティカンティ、バヌワティをめぐるアルジュノ、ドゥルユドノの物語などがある。インドの原作では、ドラウパディーはパーンダヴァ五王子共通の妻とされているのに、ワヤンでは、ドルパディはユディスティロだけの妻とされている点も、ワヤンにおける男女の愛の強調と結びつけて考えることができるかもしれない。

おそらくワヤンにおける男女の愛の物語の中でも白眉と呼びうるのがサルヨとスティヨワティの物語であり⁷⁰、インド版では道化役を勤めたとも言えるシャリヤは、インドネシアにおいて、世話物の二枚目サルヨとして、華麗な変身を遂げたのである。

(2) シカンディンからスリカンディへ

王女アンバーは、義弟の妃にと、ビーシュマによってスワヤンヴァラ（婿選び式）会場から連れ去られた。アンバーには既に心に決めた相手がいたため、ビーシュマにその旨伝え、その相手のもとへ走るが、一度他の男に連れ去られた女を彼は拒否した。アンバーはビーシュマのもとに戻り、事情を話して妻にしてくれと頼むが、生涯不婚の誓いを立てていたビーシュマには、その願いをかなえることはできなかった。アンバーは再び、かつての男に会いに行くが、再度拒絶される。

アンバーは自分はビーシュマがもとで結婚できなくなったのだと彼を恨む。ビーシュマを殺してくれる男をさがすが、天下無双の勇者との勝負を引き受けてくれる者はなかなか見つからない。やっとビーシュマの師バラシュラーマが引き受け、ビーシュマと死闘を行うが、ビーシュマを倒すことはできない。

アンバーは自らビーシュマを倒すべく、厳しい宗教的苦行を行う。それを愛でてシヴァ神が、おまえは生まれ変わり、男になってビーシュマを倒すだろうと祝福する。アンバーはただちに薪を集め火をつけ、それにとび込んだ。生まれ変わったアンバーは、ドラウパディーの父ドルパダの息子シカンディンとなり、クルクシェートラの大戦で、アルジュナと組んでビーシュマを倒し、思いを遂げた。

『マハーバーラタ』の登場人物たちの中でも一際異彩を放つアンバー＝シカンディンだが、ワヤンの世界では、大幅な変容を被っている。ワヤンのアンバーであるオンボは、ビスモが過って放った矢によって命を落とす。ワヤンのシカンディンであるスリカンディは、ドルポド（インドのドルパダ）の子ではあるが、女性である。クル・カセトロの戦いでスリカンディはアルジュノと組んでビスモと戦うが、その際、オンボの霊魂がスリカンディに乗り移り、ビスモを倒す。

つまりワヤンではインドのアンバー、シカンディンに当たるオンボ、スリカンディは生まれ変わりの関係にはないのである。オンボの霊魂がスリカン

ディに乗り移るという展開はアンバーとシカンディンのつながりをインドから部分的に引き継いでいるが、全面的にはなかった。

この点につき、松本は、「ワヤンではあまり生まれ変わりという考え方はせず、魂が入るという考え方をする」と言う⁷¹⁾。ジャワでもインドからのヒンドゥー教、仏教の流入により、輪廻、生まれ変わりの思想はおそらくなじみであったはずだが⁷²⁾、ワヤンでは生まれ変わりのモチーフは用いられなくなっているのである。その代わりに魂が入る、乗り移るという話型が好まれる。

スリカンディはまた、アルジュノの弓の教え子であり、第二の妻ともされている⁷³⁾。シカンディンからスリカンディへのこうした移り行き、設定の変化の理由、経緯についても筆者には今のところ不明である。

(3) ガトートカチャ、インドネシアでは第一の人気者に

ガトートカチャはビーマと魔族の女ヒディンバーの間に生まれた息子である。自在に身体を巨大化させることができ、空を飛び、奇想天外な攻撃をしかける。カルナとの死闘で倒されるが、その時、カルナがアルジュナ用にとっておいた必殺の武器を使ったことで、後のアルジュナ・カルナの決戦でのアルジュナの勝利が確定したともされる。パーンダヴァ方有数の戦士の一人である。

インドネシア版のガトゥコチョもビモの息子という設定は同じだが、インドネシアではマハーバーラタきっての人気キャラクターとなっている。インド有数の名門大学 J.N.U. の初代インドネシア語教授で、『東南アジアのマハーバーラタ』⁷⁴⁾のヒンディー語訳者チャンドラダット・パーリワールや、松本亮をはじめとするワヤン協会の人々の証言はいずれもそれを裏付けている。インドではあくまで物語に彩りを添える名脇役といった役どころのガトートカチャ⁷⁵⁾の一番人気ガトゥコチョへの変貌は印象的である。インドネシアにおけるガトゥコチョの人気の秘密は何なのだろうか。

前述のパーリワールは、インドネシアのマハーバーラタではガトゥコチョ

が最も人気があると筆者に最初に告げた人である。2001年2月半ば、彼のデリーの自宅でのことだった。彼は、その際、「ガトートカチャはビーマとアスラ（ラクシャサ）の女との間の子だが、その点が人気の秘密らしい」と語った。筆者にはガトッコチョの非常な人気という話が意外で、その時、その理由についてさらに問いただすことができなかった。なお、パーリワール家の居間には、インドネシアで女性だけで演じる劇でガトッコチョを演じている二人の女性をあらわしたものだという人形が飾られていた。

パーリワールが訳した『東南アジアのマハーバーラタ』へのカマラーラトナムによる「序文」には、インドネシアにおけるガトッコチョの人気に関して以下の発言がある。その父がカルノに心酔していたため、「良いカルノ」という意味の名をつけられた「スカルノ大統領は、自分は本当はガトッコチョだと考えている。…現在では空中戦も必要なため、空を飛べるガトッコチョはアルジュノより人気がある」⁷⁹。しかしここでは、ガトッコチョの人気のなぜとび抜けたものになったのかについてまでは明確に語られていない。

ワヤン協会の大和田尚は、かつて筆者に、「ガトッコチョはさすがしく潔癖。インドネシアではガトッコチョは人間より純情」と語ったことがある⁷⁹。松本邸でのワヤン協会のパーティーに呼ばれ、インドネシアでのガトッコチョの人気の秘密を協会員たちに訊ねた時の回答である。協会の他の会員たちからはこの問題につき、それ以上の発言はなかった。

今回、『ワヤン・ジャワ、語り集成』に収められたガトッコチョを中心とする3つの演目（「ガトッコチョの誕生」「ガトッコチョの結婚」「天翔けるガトッコチョ」）を読んでも、結局、筆者には今のところ、いまひとつガトッコチョの人気の秘密はわからない。

ともあれ、ガトッコチョは確かにワヤンのマハーバーラタでは、突出した人気を誇っている。ワヤン協会の方たちによると、対抗馬は、カルノ、そしてガトッコチョの父ビモ。カルノの人気の高さについてはインドのカルナと同様だが、ビモは、インドのビーマよりも存在感を高めているようだ。ビモ

はビーマとは異なり、高度な哲学的議論も展開するし⁷⁹⁾、クレスノを手厳しくやり込めもする⁷⁹⁾。「ワヤンそのものが歴史の移ろいのあいだにいかにもモノの双肩に負わせるものを大いならしめてきたか、思い知らされるのである」⁸⁰⁾。

反対にクレスノ、アルジュノは意外に人気がないらしい⁸¹⁾。一部のインドネシア人の中でのクレスノの不人気は、ワヤンのマハーバーラタの悲劇の冷厳なディレクターという役どころから無理からぬところでもあろう。アルジュノは、家柄も良く、天下無双の武術の達人、姿美しく、女性にもてにもてる。全てに恵まれ過ぎていると見え、少なからぬ大衆の共感を得にくいのか。インドにおけるアルジュナの人気にも、正にそうした理由で微妙なものがある⁸²⁾。

アルジュナ、アルジュノの意外な不人気はインド、インドネシアに共通するが、インドネシアのクレスノとは違い、インドではクリシュナは高い大衆的な人気を誇っている。結局、インドネシアはイスラーム中心の国、インドはヒンドゥー教中心の国ということだろうか⁸³⁾。

(4) ワヤンではバラモンは目立たない

インドの『マハーバーラタ』では、カースト的にはクシャトリヤが最も多くの主要登場人物を抱えている。ハースティナプラ王国の継承をめぐる従兄弟どうしの同族戦争の物語なのだから、当然である。これについては、バラモン（ブラーフマン）・カーストの登場人物たちが目立つ。

インドでは、カースト制度の序列がほぼ固定し、バラモンが最上位に君臨するようになる前の時代には、宗教的特権階級たるバラモンと政治的・世俗的特権階級たるクシャトリヤとは熾烈な対抗関係にあった。仏教文献、ジャイナ教文献にはそれを反映して、バラモンよりもクシャトリヤを上位に位置付けた記述が見られる⁸⁴⁾。『マハーバーラタ』の様々な挿話の中にも、バラモン対クシャトリヤの対抗関係を如実に示すものが少なくない。

『マハーバーラタ』は最初、クシャトリヤの手で語り始められたが、後に

バラモンの手で大幅に修正・追加が行われた⁸⁵⁾。紀元前 400 年から紀元 400 年ほどの長い成立過程⁸⁶⁾の間に、『マハーバーラタ』の性格は大きく変容していったのである。それでもかつてのバラモン対クシャトリヤの対抗関係、クシャトリヤ優位の名残は随所に窺われるが、バラモン編集者の意向を反映して、バラモンの優位、バラモンの神聖さを語るエピソードが少なくない。ヴァシシュタと対抗しバラモンの威力を見せつけられ、長い苦行の末、バラモンになったもとクシャトリヤのヴィシュヴァーミトラの物語や、父親をあるクシャトリヤに殺され、復讐のため、地上から 21 回もクシャトリヤをほぼ根絶やしにした戦士バラモン、パラシュラーマの物語などが中でも代表的なものである。

バラモン対クシャトリヤの対抗関係とは一応無縁だが、インドの『マハーバーラタ』の物語を大きく動かすバラモンは他にも数多い。『マハーバーラタ』の著者とされながら、物語にも登場し、ドリタラーシュトラ、パンドゥ、ヴィドゥラの父となったヴィヤーサ、パランダヴァ五王子の上の 3 人の母クンティーの若き日に、神を呼び出す呪文を授け、カルナの出生のもととなり、パランダヴァの出生にも間接的に関わったドゥルヴァーサ、過って自分を射殺したパンドゥに呪いをかけ、パンドゥとハースティナプラ王国の運命を暗転させたキングマなど、枚挙にいとまがない。

しかし、『マハーバーラタ』のバラモンの主要登場人物たちは、ワヤンのマハーバーラタでは、総じて目立たない。中でも、ヴァシシュタ、ヴィシュヴァーミトラは全く登場しない。パラシュラーマのインドネシア版、ロモパラスは登場はするものの、インド版での重要なエピソードはほとんど姿を消しているようだ。

戦士バラモン、ドローナの変容にも注目すべきだろう。カマラーラトナムは、「ドローナはインドネシアでは心のねじくれた陰謀家として記憶されている」としている⁸⁷⁾。インドではそうではないが、インドネシアでは悪役キャラクターとなっているのである。ドゥルノのワヤン人形の姿も「鼻がまがり歯茎がみえ耳がよじれて不細工」⁸⁸⁾と、それらしい。

インド版では、ドローナの死の描写は厳肅なものである。「(ドローナは：筆者) ヨーガに依止し、光明となって、…昇りがたい天に昇って行った。彼がそのような状態になった時、二つの太陽があると我々は思った。太陽のように輝くドローナという月が昇る時、天空は一面に光明に満ちた」⁸⁹⁾。しかし、ワヤンではドゥルノの死はこうなる。「ドルストジウムノ (インドのドリシュタデウムナ：筆者) は…凶暴に、失神したドゥルノの戦車にとびのり、その首を、一撃のもとに刎ねた。天地をどよもす、ぎゃあ——、の叫びが最後だった」⁹⁰⁾。

ドローナの息子アシュヴァッターマンは、クルクシェートラ大戦がパーンダヴァの勝利に終わった後、パーンダヴァ陣営に夜襲をかけ、外出していた五王子、クリシュナなど数人を除いて皆殺しにした。このようにインドでも悪役的な行動はしているのだが、ワヤンではドゥルノの息子アスウオトモは、夜襲に加え、さらに下卑た振る舞いをさせられている。ドゥルユドノの妻だが、アルジュノと恋仲の美女バヌワティを陵辱しようとしたのである⁹¹⁾。バヌワティは何とか逃げ延びたのではあったが。

アスウオトモの死後の霊魂は、クレスノから以下の呪いを受ける。「アスウオトモよ。お前のような奴は死にきれぬものぞ。呪われてあるのだ、お前は牛糞からよじり出る虫クワンウンとなれ！」⁹²⁾。クワンウンは、「いまなおジャワの地に生きて、子どもたちの慰みものとなっている」⁹³⁾。

ドローナ、アシュヴァッターマンの戦士バラモン親子のインドネシア版ドゥルノ、アスウオトモは、実はバラモンではないようだ。単なる戦士、武将である。バラモン、クシャトリヤが熾烈なヘゲモニー争いをする社会は、ワヤン・プルウォを生み出したインドネシアのものではなかった。ワヤンのマハーバーラタで、バラモンが総じて目立たず、ドゥルノ、アスウオトモ親子のようにバラモンではなくなっていたりするのも、こうしたことの反映であったろうか。

おわりに

本稿では、インドの『マハーバーラタ』がインドネシア化していく過程を具体的にたどることはできなかった。しかし、そうしたインドネシア化の結果については、多少の整理をすることができたかと思う。

インドネシアはインドに次いで、『マハーバーラタ』が現役文化財としての勢いを保っている国である。松本亮も強調するように、ワヤン・ブルウォのマハーバーラタ演目の文学性の高さはしばしば比類がない。インドの原作は素晴らしいが、インドネシア版もまた違った高みにまで上り詰めている。両者の文学性の優劣は興味深い問題だが、答えは簡単に出ないであろう⁹⁾。その高みにより親しむため、またインドの『マハーバーラタ』について側面から考えるためにも、筆者は今後ともワヤンのマハーバーラタへの注目を続けていくつもりである。

註

- 1) 矢野暢編著『東南アジア学への招待』日本放送出版協会、1977年、198頁。
- 2) 『アジア研究所叢書13 アジア人の価値観』亜細亜大学アジア研究所、1999年（以下、『アジア人の価値観』）所収。
- 3) 本稿はこの点について詳細に語ることはできなかったが、インドの原作のごく瑣末なエピソードの登場人物までがインドネシア版にも入っているなどである。たとえば、ニウォトカウォチョ。
- 4) NHKFM「日曜喫茶室」。
- 5) 『アジア人の価値観』95頁。
- 6) 亜細亜大学国際関係研究所『国際関係紀要』第20巻第1・2合併号、2011年3月。
- 7) 松本亮『マハーバーラタの蔭に』八幡山書房、1981年（以下『蔭に』）、17頁。
- 8) ヴァールミーキ（岩本裕訳）『ラーマーヤナ』2、平凡社東洋文庫、1985年、304頁。
- 9) 『蔭に』20 - 22頁。松本亮『ジャワ影絵芝居考』誠文図書、1975年（以下『影絵』）、246 - 251頁。後者において、松本はワヤン・ブルウォを5つのラコン（演目）群に大別している。
- 10) 『影絵』20頁。
- 11) 同書、21頁。
- 12) 『蔭に』20 - 21頁。

- 13) 『影絵』247頁。
- 14) 『蔭に』173頁。
- 15) 『影絵』247頁。
- 16) 松本亮『ラーマヤナの夕映え』八幡山書房、1993年(以下『夕映え』)、438頁。
- 17) 松本亮『悲しい魔女 インドネシアの物語』筑摩書房、1986年、169頁。4つの王家の対立は、オランダの分割統治策によるものであった。マルバングン・ハルジョウイロゴ(染谷臣道・宮崎恒二訳)『ジャワ人の思考様式』めこん、1992年、117頁。
- 18) たとえば2003年12月13日、松本邸にて。当日は三一書房からの全9巻の『マハーバーラタ』(1991-98年)の編訳者である山際素男なども出席していた。インドネシアにおける『マハーバーラタ』に比しての『ラーマヤナ』の相対的不人気については、金子量重・坂田貞二・鈴木正崇編『ラーマヤナの宇宙』春秋社、1998年、156頁、ハルジョウイロゴ前掲書、52頁をも参照。
- 19) 松本氏談。2003年9月2日、松本邸にて。高殿良博は、ワヤンにおける「見る」ことの意味をもう少し重んじているように見える。高殿良博「インドネシアの暮らしと文化」『アジア人の価値観』108-109頁。また、染谷臣道の次の発言は、近年、ワヤンにおいて「聞く」より「見る」の比重が高くなってきていることを示していると言えようか。「多くの若者にはもはやワヤンから人生訓を学びとろうという姿勢は消えつつある。彼らの多くは、劇的で動きがあり、娯楽性に富むワヤンを好む傾向にある」(ハルジョウイロゴ前掲書「解説」218頁)。ワヤンはテレビの娯楽番組ともなっている(同書、198頁)。
- 20) 『蔭に』396頁。
- 21) 松本氏談。2004年7月2日、松本邸にて。同年6月5日の日本ワヤン協会による渋谷ラ・ママでのワヤン徹夜上演の感想を語りながら伺った話である。
- 22) 『影絵』108頁。ソロ・スタイルとジョクジャ・スタイルの対抗関係は、ワヤンに限らず、ジャワの様々な文化領域に見られるようである。ハルジョウイロゴ前掲書、162-164頁。
- 23) 松本亮編訳『ワヤン・ジャワ、語り集成』上、八幡山書房、2009年(以下『集成』上下)、3-4頁。
- 24) インドネシア版の人名については、『蔭に』末尾(410-411頁)の「主要人物系図」によった。
- 25) 松本亮『ワヤン人形図鑑』めこん、1982年(以下、『図鑑』)、「2グル」。同書には頁が記されていない。
- 26) 前川輝光『マハーバーラタの世界』めこん、2006年参照。
- 27) Max Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft*, fünfte revidierte Auflage, besorgt von Johannes Winckelmann (Studienausgabe), Tübingen: J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), 1972, S. 263 (マックス・ウェーバー(武藤一雄・藺田宗人・藺田坦訳)『宗教社会学』創文社、1982年、50頁)。
- 28) Peter Hill, *Fate, Predestination and Human Action in the Mahabharata*, New

- Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers,2001,p.367.
- 29) 中村廣治郎「イスラム教」小口偉一・堀一郎監修『宗教学辞典』東京大学出版会、1973年、21頁。
 - 30) エッセイではあるが、ジャワ人の唯一神と結びついた運命観については、ハルジョウィロゴ前掲書、第3章「ジャワ人の宗教的態度」、第4章「ジャワ人の運命主義的態度」参照。
 - 31) 『蔭に』90 - 91頁。
 - 32) 『図鑑』「11 プロモ」。
 - 33) なお、後述の『東南アジアのマハーバーラタ』にはプトロ・グルについての記述はない。
 - 34) 『図鑑』「8 ウィスヌ」。
 - 35) 同上。
 - 36) 『蔭に』91頁。
 - 37) 同書、87 - 88頁。
 - 38) 同書、93頁。
 - 39) *Hillop.cit.*,p.168.
 - 40) 上村勝彦訳『原典訳マハーバーラタ』3、ちくま学芸文庫（以下『原典訳』とし、巻数、出版年を添える）、2002年、85 - 86頁。
 - 41) 『夕映え』21 - 22頁。
 - 42) *Hillop.cit.*,p.166.
 - 43) *Ibid.*,p.366.これと関連してクリシュナと「運命」「時」「摂理者 (Ordainer)」を同一視したゼーナーの発言をも参照。R.C.Zaehner,*The Bhagavadgita*,London: Oxford University Press,1969,p.301.
 - 44) 『蔭に』110頁。
 - 45) 『図鑑』「127 スマル」。
 - 46) 『集成』下、846頁に、スマルのプトロ・グルへの勝利のエピソードが紹介されている。
 - 47) 『影絵』138頁。
 - 48) 同書、145頁。
 - 49) 同書、195頁。
 - 50) 同書、195 - 196頁。
 - 51) 2000年のデータ。『データブックオブ・ザ・ワールド 2011年版』二宮書店、2011年、180頁。
 - 52) 『原典訳』2、2002年、406 - 407頁。
 - 53) 『集成』上、356頁。
 - 54) 『蔭に』69頁。
 - 55) 同上。
 - 56) 『原典訳』2、406頁。
 - 57) 同書、411頁。

- 58) 前川前掲書第2章「カルナの悲劇」参照。
- 59) 『原典訳』5、2002年、406頁。
- 60) 『蔭に』121頁。
- 61) 同書、121 - 122頁。
- 62) 同書、88頁。
- 63) 同書、122頁。ただしインドネシアではカルノは常にこのように語られるわけでもないようだ。ハルジョウィロゴは、カルノのドゥルユドノ（スユドノ）への忠誠を強調する19世紀後半の詩を紹介している。「自身の兄弟ダナンジョヨ（アルジュノ）との決闘は カルノ王（スルヨプトロ）の望むところ それはスユドノ王への恩返し之机 会 それゆえ、彼は死ぬまで闘う」。ハルジョウィロゴ前掲書、57頁。ハルジョウィロゴはこれに続けて、恩義というものがジャワ人にとってどれほど重要かを強調している。
- 64) 『蔭に』303頁。
- 65) 同書、295頁。
- 66) 同書、368頁。
- 67) 『図鑑』「140サルヨ」。
- 68) 同書、「141スティヨワティ」。
- 69) 同上。
- 70) 『集成』上巻の「ノロソモ」、下巻の「サルヨの死」を参照。
- 71) 2006年1月11日、オンボとスリカンディが生まれ変わりの関係にないことについての筆者の質問に電話で回答していただいた。
- 72) 「(ジャワでは) イスラム、カトリック、プロテスタントの三つの宗教は、ヒンドゥー教や仏教の残した要素と混じり合い、融け合っているのので、各々の宗教はその純粋さを保っていない」。ハルジョウィロゴ前掲書、37頁。
- 73) 『蔭に』161頁。
- 74) Saleh(ed.), *Mahabharata — Dakshin Purva Eshiya Main* (Anuvadak: Chandradatt Paliwal), Dilli: Samanantar Prakashan, 1983.
- 75) 2000年10月から2001年9月まで、筆者は亜細亜大学の長期海外研究制度を活用して、マハーラーシュトラ州プーナ市で1年間のインド留学を行った。『マハーバーラタ』研究のためであった。インド滞在中（そして帰国後も）、インド人と少し親しくなると、「『マハーバーラタ』の登場人物では誰が好きか？」という質問をするのが習慣となった。これまで優に3けたは調査したと思うが、ガトートカチャの名を挙げた人物の記憶がない。『マハーバーラタ』に取材した近現代の文学や映画などでも、ガトートカチャが特に注目されているケースを知らない。
- 76) Saleh *op.cit.*, "bhumika," p.5. ハルジョウィロゴ前掲書、50頁の以下の発言も参照。「空を飛ぶ偉丈夫のガトウトコチョ…が飛行士たちのシンボルになるのは当然といえよう」。
- 77) 2003年12月13日、松本邸にて。

- 78) 『蔭に』 380 頁以下。
- 79) 同書、387 頁。
- 80) 同書、386 頁。
- 81) 松本氏談。2003 年 9 月 2 日、松本邸にて。
- 82) 前川前掲書第 11 章「インド映画の中の『マハーバーラタ』」第 2 節「アルジュナの両義性」参照。
- 83) インドネシアにおけるアルジュナ（アルジュノ）、クリシュナ（クレスノ）の人気については、もっと高いことをうかがわせる証言もある。ハルジョウイロゴ前掲書、49 - 51 頁。
- 84) T.W. リス・デヴィッツ（中村了昭訳）『仏教時代のインド』大東出版社、1984 年、44 頁。
- 85) 中村元選集[決定版]第 30 卷『ヒンドゥー教と叙事詩』春秋社、1996 年、314 頁。
- 86) *Hill op.cit.*, p.xii.
- 87) *Saleh op.cit.*, "bhumika", p.4. 他に、ハルジョウイロゴ前掲書、50 頁。
- 88) 『図鑑』「146 ドゥルノ」。
- 89) 『原典訳』7、2003 年、624 頁。
- 90) 『蔭に』 246 頁。
- 91) 同書、353 頁。『集成』下、678 頁では、彼女を陵辱しようとしたのは、カルトマルモとなっている。
- 92) 『蔭に』 364 頁。
- 93) 同書、365 頁。
- 94) 松本氏は、ワヤンのマハーバーラタには、インドの原作のたとえば「ドローナの巻」の延々と続く単調で退屈な戦闘シーンなどもないとし、「インドの『マハーバーラタ』より、インドネシアのそれの方が文学的には高い」と評価している。2003 年 12 月 13 日、松本邸で。退屈な戦闘シーンの有無に関しては、筆者も同意見である。

Indonesian Mahabharata

Terumitsu Maekawa

Once Indonesia underwent strong influence of Indian civilization. Indian great epic, the Mahabharata took root in Indonesian culture. It is ten times more popular than the other Indian great epic, the Ramayana, in Indonesia.

In Indonesia the Mahabharata was Indonesianized. Wayang Purwa, shadowgraph drama, is the privileged ground of Indonesian Mahabharata.

Cosmology of Wayang Mahabharata is unique. In the Indian original Krishna is the Absolute. He is the writer, director and producer of Mahabharata tragedy. But in Wayang Mahabharata Kresna (Indonesian Krishna) is only the director of the tragedy. The writer and producer is Berara Guru (Indonesian Lord Shiva). In addition, there are two more powerful gods, Semar and the True Absolute.

Indian Mahabharata has two special tragic heroes, Bhishma and Karna. Indonesian counterparts of them, Bisma and Karna, are in a sense more heroic and more tragical than Indian originals. Almost all characters of the Indian original are pretty metamorphosed in Wayang Purwa.

In my opinion the original Indian epic is a masterpiece. And the Indonesian counterpart is also that.